

100A

12/25

Waltz

Allen

Ray

12/23

世界・日本の運命の分かれ道——「寅は千里の藪に棲む」年はに既に始まっている

森 一久

京都・三十三間堂の管主が「寅年の」新年の象徴となる文字を、墨痕鮮やかに、新 と書き示したとき、並み居る観衆は、やや度肝を抜かれたように、波乱万丈の「現在」における、この「平凡」な文字の「意味深長さ」をどう観じたであろうか。冒頭の「千里の藪・・・」は三千年前の古典中国の古典「左傳」にあり、とにかく寅(虎)は考えられない位広く、深く変幻自在に、清算・変化・発展を求めて、暴れまわるとされている。

日本で歴史上最初の政権交代が起き、そのチェンジを求めた国民自身も途惑う {と言うより判定し難い} 位の出来事が、発言が、思考様式が次々に、現れ、その幾つかは、すでに具体化し、百家争鳴の場となっている。

端的な例だが、丁度今、私の前のテレビでは、従来のNHK流の、日曜朝の典型的な官製番が放映中。ここ何十年も、ほどよく穏当な発言してくれる「権威者」を並べた、多く退屈な政治討論会「日曜討論」が繰り返されてきた。それが俄かに、NHKも変身か、駐留なき日米安保体制という言葉が、行き交っている。不思議なことに、或る出席者などは、今までの正反対の発言は忘れたように、平気な顔で、討論にうまく調子を合わせて番組は目下進行中・・・。——これだから日本人の豹変は度し難しと感じて見ている外人も居ようが——。

一昨日鳩山首相が記者会見で「戦後数十年外国軍の駐留が続いているのは異常、と予ねて思っているが、私も総理で居る間はこの意見は封印しておくつもり」と公式に発言している。

それもあってか、県知事会が、やはり沖縄だけに米軍基地の負担を押し付けているのは問題、申し訳なとい、「普天間米軍基地の県外候補地の選定に一肌脱ごうか」という、従来無かった動きがでてきた。

以上の日本の例は、筆者などから見て、比較的まともに見える出来事を並べてみだが、無論このほかにも、支離滅裂、無原則に見える政策論や出来事も山ほど眼前で起きているも、いうまでも無いが・・・。

地球環境問題がもめ続ける、そこに伏在する真の流れ。——その中からを地球・世界・人類は今後の千年の運命を選ぶことになる

完全に同義ではないが、二十世紀が植民地解放の世紀だったとすれば、地球温暖化問題における先進国と途上国・参入国との間の対立が、何百国の首脳が一堂に会しCOPEとやらで幾夜も妥協案を協議しても決着付かなかったという事実は、次の世界像に何の議論も、いわんや合意のカケラも見出せなかった、ことを意味している。

地球温暖化問題は大海に浮かぶ氷山の小さな頭の部分に過ぎない。海中の巨大な本体には次の世界像の可能性がぎっしり詰まっている。その可能性についての、各国首脳の「口に出さない未成熟な」認識或いは前認識の違いが、国際合意等出来るわけない、最大の理由である。このように本当は、単なる地球温暖化と言った底の浅問題じゃないと意外に多くの指導者「或いはそのスポンサー」は認識していて、ないのだろうか。いや、判っているから妥協しないのか。

元々今世紀は前世紀が結果的に領土の植民地が一掃された時代であったのに対し、世界経済の植民性から脱却の時代に必然的に「後述」すでに入っているのだ。それは「植民」に纏わる諸々の深刻な問題を戦争や武力で解決できない、或いはしないとなったとき、からの必然の成り行きである。冷戦終了、超大国の出現とその変貌などは、本当は初めから判っていた、

地球温暖化の真相と真因を各国は忌憚無く指摘・主張する。今地球を覆う炭酸ガスは、確かに産業革命以来先進国が、石油などの化石燃料を篡奪して安く消費した結果の集積である。

{1 時ばバーレールドル以下にもなった}。勿論先進国の経済発展で途上国も若干の恩恵を受けたかもしれないが、。。その上、戦後数十年にわたり、先進国が石油資源確保のために取った手段は、戦後の紛争の真因のすべてと言っても過言ではないという時代が続いた。「宗教の対立」と言えば、奇麗事にきこえるが、或る宗教の信者の人間性さえ、ヒビを残しており、その修復を含め、それが人類最大の課題と成りつつあると感じている。

とすれば、若し地球温暖化ガスや資源枯渇問題がなくても、脱炭素は避けて通れない道であると、すでに観じている指導者がいてもおかしくないと思われる

ばらばらの今後の世界像のままでは、「国際合意」など「百年河清を待つ」に等し

以下は主要な「切り口」の若干を掲げて、今後の分析の導入部としておきたい。少々しんきな問題提起もあるので、読者の方々からのご意見など頂ければ、さいわいである。

①途上国・新興国の経済発展に百年来の経済危機からの脱出が賭って居るとすれば・・
百年来の世界経済危機の対策は、各国の膨大な謝金の積み上げ、供給過剰、需要不足・デフレのスパイラルかの恐れの中で、産業経営者や団体の多くは、「おねだり」以上の政策提言をする気力も不足、わが社だけの生き残りを模索するのみに見える。世界経済の持続的発展ないし「存在」の姿を描けないで居る。今見えているのは、新興国の需要への期待のみ。こんな時、途上国・新興国に炭酸ガス削減を無理に納得して貰い、先進国からの技術・経済支援で、途上国・新興国から今後の需要や安い人件費をあてにして、「百年来の危機の清算」が出来るのであろうか。

②先進国の産業の将来展望は

先進刻の中で日本だけは少々違うようだが、欧米の経営者たちの将来展望には意外に楽観的なものが、垣間見られる。象徴的な現象は、百年危機のときの公的資金の返済を急速に実行している。企業への政府の関与を嫌う企業家魂には、敬意をはらいいいことだろう。

しかし問題は彼らの将来の発展像の中心に、「金融工学イノベーション」に再び重点をうつしつつあるような兆候もある。それなら、炭酸ガスなどとの関連は、従来の「日本式重厚産業とは」違うという解析がすすんでいるかもしれない

問題は、世界の指導者が、経営者の給与制限くらいで、次の世界経済危機をかいひできる確信をもてるのであろうか。

{次回に続く}